

## ロシア語の -ся動詞について

服部 文昭

J. Veyrenc は、-ся動詞におけるほど意味論的なアプローチの不足が感じられる分野はなく、現在の分類は古くからの能動、受動、中動の三分法を受け継いで曖昧な分類を繰り返し広げるのみであると述べている(注1)。

周知のとおり、かつてのロシア文法の伝統においては、-ся動詞は再帰動詞と呼ばれて独立したいくつかの態に分けられていた — 中動的再帰態、真正再帰態、相互的再帰態など —。M. A. Шелякин の指摘を待つまでもなく、最近では、-ся動詞はすべて、それらが二つの態 — 能動態(ここに属する -ся動詞は再帰動詞と呼ばれる)と受動態(ここに属する -ся動詞は再帰的受動形となる) — に属するという観点から考察されることが多い。彼はまた次のようにも述べている。「態のかつてのような細分は文法範疇としての態の記述からは既に一掃されており、そういった方法は語形成論に含められている。しかし、(現在は能動態と見なされている)再帰動詞の記述を語形成論へ移してもその態的な解釈は本質的には何も変わってはいない。記述される動詞の多くは主体-客体関係から特徴付けられ、しかるに、そこでの主体-客体関係においては「純粹な」能動態を見いだすことが困難なのである」と(注2)。

能動、受動、中動の三つの態を立てることは論外だとしても、文法範疇としての態としてロシア語に能動態と受動態をすんなりと認めることができるのだろうか。もちろん、形態、統語、語彙の言語体系の諸レベルの手段に加えて、文脈や発話の状況なども用いる機能的意味的カテゴリーにおいては能動の意味や受動の意味を表す表現が存在することは言うまでもない。しかし、ある共通の要素(これは形態的に表されねばならず、かつ、高度に抽象化された共通の意味を有するものでなければならない)が媒介となって、その要素を備えたものが一つのグループを形成する文法的なカテゴリーにおいては、そのような疑念を抱かざるをえない。先ほどのM. A. Шелякин の主張の後半からもそのような疑念は生ずる。

実際のところ、今日までに積み重ねられてきた多くの研究にもかかわらず、ロシア語の態についての統一的な見解がまだ得られていないことについては既に拙論で述べたが(注3)、ごくごく大雑把に言っても、シャーフマトフや80年版アカデミー文法に代表され

る、動詞の作用の主体ならびに客体との関係であるとする意味的な面に重心を置く学説から、他方、イサチェンコに代表される、主語と動詞の間関係であるという統語論的な学説、さらに、それらの折衷的なものまで様々である。

このような状況を克服するにはどうすべきであろうか。

形態的にも統語的にも、さらに意味の上でも特徴のあるグループとして *-ся* 動詞を括ってしまうことは当然なされるべきことである。しかし、それをかつてのようではなく、今日的に行わなければならない。そしてその出発点としては、形態的な特徴に基づく態の分類を主張したフォルトゥナートフとその後のヤーコブソンによる、再帰態と非再帰態の二分法を採らねばならない(注4)。その結果、

*-ся*を持たない動詞 : *-ся*を持つ動詞

非再帰態 : 再帰態

(より自然で頻度も高いもの)

(より特殊で頻度も低いもの)

という対立を見いだすことができる。

一般に能動とか受動とか呼ばれるものは、ロシア語では、非再帰態の中において機能的意味的カテゴリーとして存在するのである(注5)。

*-ся*で終わる動詞は、はたして語形成による別の語とみなすべきなのか、それとも同一語の変化形なのかについても意見が別れている。*-ся*で終わる動詞はすべて独立した別の語とする説もあるし(注6)、受動の意味を表す *-ся* 動詞は同一語の変化形であるという説もある(注7)。完了体の動詞と不完了体の動詞のいわゆるペアについても同様な問題が生ずるのだが、このような議論で出される証拠は一種の諸刃の剣で、ヤンコ・トリニツカヤらの主張にもかかわらず、それと同程度の蓋然性を持って *-ся* は語形成の形態素ではなくて文法的な形態素だとも言えるのである。

いずれにせよ、再帰態という文法範疇が立てられた以上は、*-ся* は文法的な形態素ということになる。

再帰態の表す意味は、述語動詞によって表される動作・状態がその主語(ゼロ主語をも含み、一方で、与格などのいわゆる意味上の主語は含まない)に収束するということである(注8)。この際、収束の実現は動作が戻る自身に限らず(例文の(a)、(b))、自身の所有物に戻る場合((c))、さらに抽象化され、自身との利害関係や感情の現れの意味をも表す((d)、(e)、(f))など、多岐にわたる。このような再帰態の意味から考えれば、非再帰態動詞のうちの対格と結びつく動詞のみならず、対格とは結びつかない動詞からも再帰態が形成されることが理解できる((g))。もとより、この収束の実現にあたっては、動詞の持

つ語彙的意味の影響を無視することはできない(注9)。

- 例文 (a) Он оделся в пальто.  
(b) Он умылся под краном.  
(c) Он быстро застегнулся на все пуговицы.  
(d) Он сейчас строится за городом.  
(e) Иван решился ехать.  
(f) Эта собака не кусается.  
(g) Он стучался в дверь.

ごく小さな形態素 *-ся*にこれほどの多様な意味を負わせるのかという疑問もあるかもしれない。しかし、*-ся*によって表される再帰態の文法的な意味は、述語動詞によって表されるものがその主語に収束するということであり、その収束の実現にあたっては、動詞の持つ語彙的な意味とのある種の共同作業となるのである。これは、動詞の体の現れの場合と同様である。решить : решать における僅か *и* と *а* の差で示される体の意味を思えば、別に不思議なことではないはずである。また、стул という名詞の複数形を考えた場合に、そこでは、同じ形の椅子、違う形の椅子、大きな椅子、小さな椅子、新しい椅子、古い椅子、といったことは一切問われずに、複数の概念のみが示されるのである。再帰態においてもその文法的な意味は一つであり、ただし、その実現形において語彙的な差が現れてくるだけのことである。

接尾辞 *-ся* は再帰態を形成すると同時に、非再帰態の中における機能的意味的カテゴリーとしての受動表現を表す手段の一つとしても転用されている(注10)。したがって一口に *-ся* で終わる動詞といっても、そこには、再帰態の標識たる *-ся<sub>refl</sub>* で終わる動詞と、受動表現を表す手段の一つとして転用された *-ся<sub>pass</sub>* で終わる非再帰態の動詞とがあることになる。

しかしながら、この両者の区別は簡単である。もちろん、形態上の基準は無いが、意味的なレベルでの主体と客体の存在、さらにそのうちで主体が主語化されている同じプロセスを異なった価値観(コミュニケーションにおいて主体と客体のどちらに重点を置くかについての発信者の評価)から見た表現を、たとえ人為的なものにせよ、想定できる場合の *-ся* で終わる動詞は、*-ся<sub>pass</sub>* である。

同じ動詞であってもその用いられ方によって、ある時は *-ся<sub>refl</sub>*、ある時は *-ся<sub>pass</sub>* となることもある。

例1 Он сейчас строится за городом. (-ся<sub>refl</sub>)

例2 Новое здание сейчас строится студентами. (-ся<sub>pass</sub>)

例2では、Студенты сейчас строят новое здание. という主体と客体が存在し、さらにそのうちで主体が主語化されている同じプロセスを異なった価値観から見た表現を想定できる。一方、例1に対しては

例1' Он сейчас строит дом за городом.

という主体と客体が存在し、さらにそのうちで主体が主語化されている表現を想定できる。

しかし、そこで表されているプロセスは、-сяで終わる動詞によって表されているプロセスとは同一のものではない。例1' ではдомは必ずしも彼自身のための家ではないからである。例1' は、別の例、

Он сейчас строит мост за городом.

と同列に論じられるべきものなのである。

再帰態：非再帰態の対立の区別が明確なのに対して、再帰態の -ся<sub>refl</sub> と受動表現を表す -ся<sub>pass</sub> との区別は、文法的な根拠も無いので恣意的ではないかと思われるかもしれない。しかし、受動表現それ自身が機能的意味的カテゴリーなのだから、ここに形態論的な特徴が無いことを指摘しても始まらない。

ヤンコ・トリニーツカヤ以来、-сяで終わる動詞を отобъектные と отсубъектные というような二つのグループに大別し、-ся<sub>pass</sub> は前者に属するものとして論ずる議論がある。M. A. Шелякин も同様の大分類を用いている。また、J. Veyrenc は -ся 動詞を verbes réflexifs と constructions récessives とに分類し、前者は語形成による別個の語であり、-ся<sub>pass</sub> の属する後者は同一語の変化形だとする(注11)。

-ся 動詞のこのような分け方は、一見すると尤もなようにも思える。しかし、先に挙げた строится の例を見れば分かるとおり、動詞のカテゴリーそのものが二分されるわけではけしてなくて、動詞の用いられ方に二通りある、ということなのである。

例3 Птица бьётся о прутья клетки.

例4 Посуда часто бьётся.

たとえば、再帰動詞を大きく二つに分けることをしない多くの研究でも、例4の**бьётся**のような場合に、これらの動詞は **пассивно** という枠をさらにかぶせた再帰動詞として分類されている(注12)。しかし、これは、**бить**という動詞の非再帰態での用法のうちで、意味的に受動表現と考えられる用い方にすぎないのである。先ほど述べたように、

例4 **Посуда часто бьётся.**

例4' **Мы часто бьём посуду.**

意味的なレベルでの主体と客体の存在、さらにそのうちで主体が主語化されている同じプロセスを異なった価値観から見た表現を、たとえ人為的なものにせよ、想定できる(4')場合の **-ся**で終わる動詞は、受動表現を表す手段の一つとして転用された **-ся<sub>pass</sub>**なのである。

このように、再帰動詞を **отоъектные** と **отсубъектные** というような二つのグループに大別することは意味のないことであり、再帰動詞はあくまで再帰態の動詞なのである。

受動表現を表す手段の一つとして転用された **-ся<sub>pass</sub>**に関して、造格の出現にこだわる議論もしばしば見られる。しかし、これについても、造格という形態論的な手段で必ず表現されなければならないと考える必要はない。なぜなら、ある受動表現に関して意味的なレベルで主体と客体が存在し、さらにそのうちで主体が主語化されている同じプロセスを異なった価値観から見た別の表現が、たとえ人為的なものにせよ、想定できるものであればよいので、その受動表現の中では造格のみならず、与格、**от+生格**、さらに表現されない場合、いずれであれ、すべて認められるのである(下の諸例を参照)。

Строительные материалы быстро и осторожно поднимаются крановщиком  
на верхние этажи здания.

Ему вспомнилась старая песня.

Я утомился от усиленной работы.

Посуда часто бьётся.

上掲の諸例と同じような次の例文に関して、M. A. Шелякин は、

Деревья гнутся от ветра.

Мои туфли уже изнашивались.

Он проснулся от грохота машина.

今ここで論じているような表現においては、《самопроизвольность》が問題なのではないと述べる。そうではなくて、ここで大切なのは、話し手にとって動作の原因が不明であること、本質的でないこと（故意に告げられていないことも考えられる）、自然発生的な制御できない性質（人間の作用の及ばぬ自然的な）、表面的な原因への諸状況の合流などであるとする。さらにまた、このような動作の引き起こし手は、あるいはコンテキストにより表され、あるいは語彙的に表されるが、客体に向けられた動作の実現に際して故意性や随意性に欠けるのでけして動作主とは認められない。それゆえ真の受動とは認められないとする（注13）。

しかし、Соль растворилась в воде. に対して вода が主語となったВода растворила соль. という表現が存在する以上、動詞の表す動作の方向性が反対方向に変化しているといえる。したがって、受動表現として認めるべきである（もちろん、その中で下位区分を設けることは自由であるが）。

受動表現を表す手段の一つとして被動形動詞（受動分詞）による構文を補いながら用いられる -сяで終わる動詞についてはしばらく措くとして、-ся動詞についてこの他のいくつかの問題点を考えてみたい。

例5 Эта собака не кусается.

例6 Сегодня ему не работается.

例7 Сады как острова зеленеются среди тошей равнины.

例5は、しばしば、特別に扱われているが、実は、строится と同じ枠内で扱えるのである（後述）。

例6が受動表現だとすると、どう考えるべきなのか（注14）。この文の根底にあるものとして次の二文を想定できる。なお、ここでの議論が通時や共時という概念のレベルではないことは言うまでもない（注15）。

\* Сегодня он не работает  $\phi$  (やる気、働く気持ち)。

↓

\* Сегодня  $\phi$  не работается ему.

↓

例6 Сегодня ему не работается.

いわゆる無人称文において自然など超人間的な $\phi$ 主語を想定できるように、ここでは、人間の意識を超えた $\phi$ 目的語を想定できる非再帰態の文の受動表現に当たると見なせる。自然など超人間的な $\phi$ 主語を想定できないいわゆる無人称文において、ロシア語は主語の無い文に慣れている。しかし、目的語で、省略などではなしに、 $\phi$ を含むような文には馴染みがない。ロシア語の体系内で認められていない。そこで、体系内で認められる文として実現するために、 $\phi$ を主語化した受動表現化を選択したのである。能動表現としては存在できないが、 $\phi$ 主語を伴う受動表現としては存在を認められるのである。従来いわれていたいわゆる自動詞からの -ся動詞や他動詞の絶対用法からの -ся動詞はこのように考えられるのではないか。

例6のような文は民衆語的なものと考えられ、語彙も具体的・日常的な意味の動詞において多いことが既に指摘されている(注16)。ここにおいて、やはり同じような特徴を持つ、y+生格と被動形動詞短語尾中性形で作られる構文との平行性が想起されるが、これについては、稿を改めて論じたい。

ここで例5について触れよう。多くの研究で、このような文は特別の区分が当てられている。しかし、動詞自体の語彙的な意味や、語用論的な原因によって実現のされ方は様々だが、例5と例1(Он сейчас строится за городом。)とは実は同じ構造であることを考えてみたい。

まず、строить と читать の例で比べてみたい。

例8 Иван строит себе дом в центре.

例9 Иван читает себе роман.

読み手=イワン

例8' Дом строится для Ивана самого в центре.

≒例8 (受動表現)

例9' Роман читается для Ивана.

≠例9 (受動表現)

例8' Иван строится в центре.

≒例8

例9' \* Иван читается.

例8ではイワン自身が必ずしも施工者とは限らないが、例9では読み手はすなわちイワンである。この語彙的な意味構造の差が受動表現化された場合に明確に出て、最後の例9'は認められなくなってしまう。

次に挙げる броситься や застаться は投げられたり蓄えられたりする対象物を表す語句を伴う。しかし、строиться では語用論的に「家」という要素は具体化される必要がない。

例10 Иван бросился камнями в собак.

例11 Иван запасся продуктами.

例12 \* Иван построился дом / домом в центре.

例8' Иван строится в центре.

例13 Иван собрался в дорогу. (cf. Иван собрал вещи в дорогу.)

例14 Иван бросился на собак. (Иван自身が飛びかかる≠例10)

話し手と聞き手の共通の認識次第で表現のされ方は様々だということが分かるが、「噛む」という犬に対して皆が共通に認識している事柄について述べる場合にも、対象は明示される必要がない。この点でстроитьсяの例1と例5とは同類なのである。

例1 Он сейчас строится за городом.

例5 Эта собака не кусается.

(例5' Эта собака не кусает прохожих.)

また、例8' (Иван строится в центре. )、例13 (Иван собрался в дорогу. )、さらに、例5 (Эта собака не кусается. )は認められるのに、例9' (\* Иван читается.)はなぜ認められないのかも納得がゆく(注17)。

最後に例7 (Салы как острова зеленеются среди тощей равнины. )の類について考えてみたい。いわゆる自動詞に-сяが付けられた場合で、色に関する意味を表す若干の動詞を一つのグループに括ることが普通に行われている(注18)。確かに、これらの語彙的な意味の共通性は強く訴えるものがあるが、それはそれとして、ここではむしろ名詞派生の動詞であるという点に注目したい。дымиться, светиться, стареться, тлетьсяなどの動詞を思い浮かべて欲しい。皆まとめて、строиться в центре, стучаться в дверьなどと同じ構造的な意味を持つ動詞として扱うべき類なのである。先に例6 (Сегодня ему не работается.)に関して、

\* Сегодня он не работает φ (やる気、働く気持ち)。

という文を想定したが、その場合とは異なって、дымиться, светиться, стареться, тлетьсяや белеться, зеленетьсяなどといった動詞では、仮にφ目的語を想定するとしても、それはいわゆる同族目的語と見なせよう。したがって、例6におけるような人間の意識を超えたφ目的語などではなく、ずっと身近で普通の日常的な名詞が目的語として出てくる



と考えられるのである。この例7の類の文は次のように想定された文、

\* Сады как острова зеленеют себе  $\phi$  (同族目的語) .

を基にして、例6 (Сегодня ему не работается.) ではなく、例8 (Иван строит себе дом в центре. )、例12 (\* Иван построился дом / домом в центре.)、例8' (Иван строится в центре. )などと比較対照されなければならないのである。その結果、この例7 (Сады как острова зеленеются среди тощей равнины. )の類の文は再帰態の動詞文に分類される。

светиться について一つ補足しておく、

( \* Её улыбка светила мне  $\phi$  (同族目的語) . )

例15 Её улыбка светила мне .

↓

例16 Я светился от её улыбки.

のような関係がある。ロシア語では、間接目的語たる与格を主語とする受動表現化は認められないことが指摘されている(注19)。この指摘を踏まえたうえで上掲の関係を見るとすると大変に興味深い、この問題もまた別稿に譲るべきであろう。

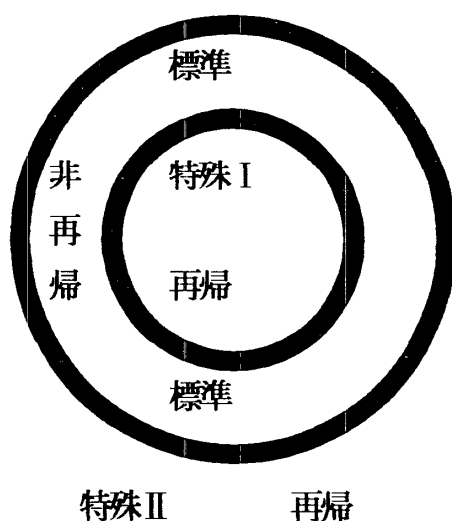
## 注

- 1 J. Veurenc、226頁。
- 2 Шелякин, М. А.、Теория функциональной грамматики. Персональность. Залоговость. Спб., 1991. 312頁。
- 3 「ロシア語の態について」『ロシア語研究』No.6、1993。
- 4 参考文献のフォルトゥナートフ、ヤーコブソンおよび上掲の拙論参照。フォルトゥナートフは、いわゆる自動詞からの-ся動詞を態から外してしまっているが(1156頁)その必要はないと考えられる。このことは本論で後述べる。

- 5 非再帰態の動詞の中で主体（動作主）と客体（被動作主）の二要素を有する動詞のグループに関してのみ、意味的機能的な分類としての受動表現が考えられる（上掲の拙論参照）。
- 6 Н. А. Янко-Триницкаяや80年のアカデミー文法など。
- 7 М. В. Панов、Л. Л. Буланин や J. Veyrenc など。
- 8 動詞を中心とした文型を統語論的に扱う際に、まったく無機的な形態論に基礎を置きつつでもなく、かといって、恣意的と思われるほど細部に渡る意味的な面から接近するのでもなく、格の本質的意味と動詞との組み合わせで考えている（拙論1993 aを参照）。主格の主語（ゼロ主語をもこれに含めて立てている）と与格によるいわゆる意味上の主語とは別個のものに見なし、後者は主語とは認めない。
- 9 タントゥムの動詞の存在も当然である。-ся動詞が無いとされる быть や течь に関しても、接頭辞が付いて語彙的意味が変われば、 забыться や растечьсяといった動詞が作りだされるのである。
- 10 上掲の拙論1993b 参照。
- 11 Н. А. Янко-Триницкая、79頁。Шелякин, М. А.、318頁。J. Veyrenc、226頁。
- 12 たとえば、В. В. Виноградовなどを参照。
- 13 М. А. Шелякин、323頁。
- 14 J. Veyrencは、原形不定詞構文（Ему не спать.）の受動と考えている（235頁）。
- 15 ロシア語において、動詞 работать は対格を支配する用法での実現がない。しかし、ここではむしろ無いということの方が重要だと思われる。それは本論で述べたとおりである。また、もう一つ指摘しておきたいことは、対格を支配する実現形の無いことは、必ずしも動詞の他動性の否定の証明にはならないということである。あたかも、<с а/о б а к а >でのハイパー音素<a/o >のように、最も強い環境での実現形が見られないために、他動詞となる潜在的な可能性を否定しきれないのである（быть以外のすべての動詞について同じことが言えると考え）。なお、他動性のカテゴリーについては、栗原（1981）、pp. 3~5 も参照のこと。
- 16 栗原（1974年）など参照。
- 17 例10（Иван бросился камнями в собак.）や例11（Иван запасся продуктами.）が認められるのに対して、\* Иван читается романами. がなぜ認められないかは難しい問題であり、その理由をここで明らかにすることができない。
- 18 алеться, белеться, светиться, зеленеться, синеться, темнеться, краснеться, сереться, желтеться, переливаться, отливаться, искритьсяなど。Шелякин の例から（321頁）。

いわゆる自動詞からの -ся 動詞の人称用法において、-ся の無い動詞と比べた際のニュアンスについて、ある場合には強調、ある場合には弱さ、などと種々述べられているが、原則は次のように考えられる。非再帰態がより頻度も高いより自然なものであり、一方、再帰態がそうでないとすると、再帰態は特別の意味を表すこととなり（もちろん、その中心は初めに述べたその文法的な意味であるが、その特別さの現れ方に差があると考えれば良いのである。）、-ся が付く前の動詞の語彙的、統語的な特徴に基づいて、しばしば指摘されるようなニュアンスが生ずると考えられる。

模式的な概念図



19 栗原 (1981年) 参照。

用例は先行諸研究および辞典から引用したが、特に意を用いた例文以外は出典を示さなかった。

参考文献

Бондарко, А. В., Буланин, Л. Л. 1967 Русский глагол. Л.  
 Виноградов, В. В. 1986 Русский язык (Грамматическое учение о слове).  
 Изд. 3-е. М.  
 Исаченко, А. В. 1960 Грамматический строй русского языка в сопоставлении

с словацким. Морфология. Ч. 2. Братислава.

Панов, М. В. 1966 Русский язык. Языки народов СССР, т. 1. М.

Панов, М. В. 1979 Современный русский язык. Фонетика. М.

Русская грамматика. М. 1980.

Теория функциональной грамматики. Персональность. Залоговость. Спб., 1991.

Фортунатов, Ф. Ф. О залогах русского глагола. Изв. ОРЯС АН, 1899. т. 4.

Шахматов, А. А. 1941 Синтаксис русского языка. Изд. 2-е. Л.

Янко-триницкая, Н. А. 1962 Возвратные глаголы в современном русском языке. М.

Veyrenc, J. 1980 *Études sur le verbe russe*. Paris.

栗原 成郎 1966 「被動の意味を表すся動詞」『スラヴ学論集』No. 1

東京スラヴ学研究会。

栗原 成郎 1974 「ロシア語における人称自動詞構文対応の無人称再帰動詞構文」

『東京大学教養学部外国語科学研究紀要』第21巻第3号。

栗原 成郎 1981 『ロシア語動詞の統辞論的研究』 科研費報告。

高津 春繁 1954 『印欧語比較文法』 岩波書店。

服部 文昭 1993a 「ロシア語の文の分析について」『RUSISTIKA』X。

服部 文昭 1993b 「ロシア語の態について」『ロシア語研究』No. 6。

R. ヤーコブソン 1973 「転換子と動詞範疇とロシア語動詞」『一般言語学』

みすず書房。

R. ヤーコブソン 1986 「ロシア語動詞の構造について」『ロマーン・ヤーコブソン

選集1 言語の分析』大修館。